

展 景

季刊

No.108



Winter 2023

目次

川をきれいに 〈短歌〉	小野澤繁雄	4
深閑寺庭 もみぢどき 〈短歌〉	河村郁子	6
秋の山 〈俳句〉	新野祐子	8
中華粥 〈短歌〉	布宮慈子	10
晩秋の風 〈短歌〉	市川茂子	12
棒の「ご」とくに 〈短歌〉	梅津純子	14
制限も緩和されつつ 〈短歌〉	大橋千佳子	16
〈那須通信 53〉 夏が終わる	加藤文子	18

対詠 「さげんいかが?」 PART 84	小野澤／布宮／河村	22
前号作品短評 A		24
前号作品短評 B		27
無二の会短信		30
編集後記		34

川をきれいに

小野澤繁雄

やや高処比企一族の墓所にきつ竹林抜けてそのかぜの音

墓所に塔それぞなれどそこに説明のある明るさ幾つ

おおよそは深さの足りぬ水路なれ深さがありてそこに鯉すむ

年よりら耳傾けて話しおり公園林はみちの傍ら

県境霧の峠のそのなかを上り下りしつ子の運転で

彼岸花に囲まれている畑かな休んでいるか畑何もなし

足し算のようなる世界新橋に増橋工事土手が通れず

人生の余白のようなみちにてススキ伸ぶ秋なれば秋風

コバトンが仲良くしていいるところなれならび歩いて川をきれいに

ガレージに玉葱下がるはみるところみればニンニクも下がつてゐる

深閑寺庭 もみぢどき

河村 郁子

菩提寺の庭はそれぞれ紅葉もみぢどきさくらもみぢと区の保護樹林
勝手にも「わたしの公孫樹いちやうこうそんじゆ」と決めし樹は黄葉きこんもり今を盛りと
名木と指定される公孫樹こうそんじゆ34メートルを樹下より見上ぐ
ゆくりなく吸ひ上げらる心地して図太き幹に寄りかかりたり
黄葉を見つめ続けてあな不思議わが胸いつぱい黄きに華やぐ
散り敷くるいやう落ち葉を踏みゆくに足裏あなうらに淡き触れ合ひ覚ゆ
しまらくを菩提樹の下に憩ひるて実を付けしままの落ち葉を拾ふ
ぎんなんは多弁 菩提樹の葉裏の実より耳元に声なき声聞く
十一面觀音様の八角堂はびたり閉ざされ御目文字出来ぬ
奥の院の千手觀音石碑まで歩み進めて落ち葉を払ひぬ

秋の山

新にいの
野祐子

月山の白と懸巣^{かけす}の白映えて

秋の日の生んだ彩雲より羽音

清太岩山は天狗の名だらう天高し

遭難の碑あり十月のごえとぞ

険谷^{けんこく}登る人の幻秋氣満つ

「また来るよ」こだまは佐渡へ鯖雲へ

身に入むや竜門小屋の水場閉ず

熊糞山^{ゆうふん}を熊鷹の舞う冬隣

モスクワ遠し峰に色づくななかまど

釣瓶落しまた思い馳す戦場よ

中華粥

布宮慈子
やすこ

ほんほんと上がる湯気なり中華粥その勢ひやよし寒き朝に
たぎる湯に米を入れればしまらくを沈んでそののち踊り始める
朝なさな中華粥を炊いてゐる爆発に似る粘りなき粥

もらひたる土鍋のかたち巧みにて強火で炊くも吹きこぼれせぬ

じつくりと水から煮出す手羽元のアクを取るとふ手間をたのしむ

鶏の旨み出でたるスープに米を入れさらにニンニク胡麻油入る

強火にて米の花咲くまでの間を火加減見つつザーサイ刻む

仕上げとてホロホロ落とす枸杞の実は中華粥に映ゆる朱なり

蓮根の丸はおもしろ包丁立てて如何なるかたちと怪しむ

小豆粥、芋粥、蓮根粥、白粥さへもわんわんと炊く

晩秋の風

市川茂子

野薺のあざみの花屋にありて里山の遠き日思い求めて活ける

ロープウェイより見放みさくる山の紅葉は蕭々として里に下り来る
街路樹の根方おちこち彼岸花時をたがえず咲きて華やぐ
台風の予報に老いの用心は彼岸会待たず墓参に出でぬ

いつの日か告ぐるべきこと抱きつつ早夫逝つまきて二十年経つ
芒の穂秋明菊など活けながら巡り来る時また重ねゆく

ハロウイーンのお化けに声を出しながらデイサービスに笑いひろがる
夕暮れのあわき陽ざしにあきつ飛ぶ心静かな一日の終り

路地を来て曲がるこの角扉ごしにハゼの実赤く小春日に映ゆ
晩秋の風に吹かれてほつほつとわくらば落ちる並木路をゆく

棒のごとくに

梅津純子

夜の廁に立たむとするに吾が体痛く固まり身動きできず
何といふわが身の重さ足立たねば搁まり立たむに手に力無し
衣類の脱ぎ着洗顔整髪ままならず身は一夜にて棒のごとくに
指の力失せて戸障子引き出しをわづか開け置く腕を頼みに
肩痛み風呂をわかして夜の更けに温まむとせしことの幾たび
激痛に一睡もせぬ肩に打つステロイド注射麻薬のごと効く
ステロイドの効きもわづかに七日ほど次を頼めば三ヶ月待てと
種々の検査に該当無き故確定すリウマチ性多発筋痛症と
夏から秋へ医療彷徨ひ辿りつくステロイド服用に痛み消えゆく
七月豪雨に泥水被りし薩摩芋指ほどが五本ああ神無月

制限も緩和されつつ

大橋千佳子

まず衣装次に発声・ハーモニー三年ぶりのステージが来る
口元を見られないのはマスクの功頗骨口角上げ放題

歌い出し二小節目で間違えた！開き直りも三年ぶりで

CDを十五人分コピーする十五回の試聴と嘆息

Nコンの子らのマスクは皮膚の一部何事もなく上げては歌う
やめ時の踏ん切りつかず来客にかざす非接触体温計

踏み絵ではあるまいし忘年会の出欠票を日々集約す

声高な忘年会のは非聞こゆ給湯室のシンクを磨く

色褪せた「売り物件」の看板を見下ろし熟すカリン馥郁

高齢のかたの住まいと思われて軒先照らすたわわな熟柿

夏が終わる

加藤文子

八月も最終となると気配は秋。そば降る雨もヒンヤリしている。

昨夜からの雨が止まず、今朝は何からはじめようか少し手持ち無沙汰の感じがしていたが、雨のかからない温室の植物たちの手入れに向かうことにした。

黒リュウに数種のシダが自然参加して共生するひと鉢が目に入る。一週間ほど前にはヒスイ色していた黒リュウの実は、ナスビ色になつて光沢を増す。リュウノヒゲの仲間であるが葉色が黒色であることから、黒リュウの名が付けられている。

鉢の中で育つ黒リュウを見て、「シックで素敵ネ」と、わが家を訪れたフランス人が言つたのを思い出す。あるようでないニュアンスの植物。

常緑種で寒さに強く、冬でも姿を保つのでグランドカバーに広く用いられているのだそう。

細長い黒色の葉をぬつて見え隠れする実の輝きを鉢の中に見る時、いとおしいような特別な思い



が湧いてくる。鉢の中、限られた小さな空間だからこそ、なおさら美しいと思うのか。

盛りが過ぎて枯れているシダを整理して、週末のギャラリーで展示したいと思った。陶の作品の並ぶバタフライテーブルの上に……。

温室に近い外棚のコバノズイナや西洋カマツカの葉の数枚は、はやくも染まりはじめた。

山モミジの上方の枝先の葉も、うすく朱がさしている。

先日まで盛んに鮮やかなピンクを放っていたミソハギの花びらは、パサパサになつて散つている。

今か今かと開花を待ちわびたタニワタリの木のパフのようなアイボリーの花は、今までに一番たくさん咲いたのに、あっけなく終わってしまった。この南方の花を、珍しいでしようと、誰かに教えてあげたかった。

それぞれの鉢中に入る末枯れた茎や葉に鋏を入れながら、活気に満ちていた春や初夏を思う。

照りつける太陽の下で乾いて仕方なかつた盆栽を追いかけて水やりに明け暮れた毎日が、つい半月前のことだつたなんてウソのようだ。汗だくなつて途中で着替えながら外仕事をしていた。

スケジュール帳の九月のページの欄外のメモには、寒冷紗を外す、バラ・ボケなど植え替える、置肥、落ち葉掃き、ドライオブジェ制作、年賀状考へる、と書いてある。

着るのは今年の夏で最後にしようと決めていた長年愛用したTシャツや紫色のカーディガン、

カットして掃除に使おうと思う。どれもすっかり色が褪せている。カーディガンの紫色の小さな前ボタンは、ラリーキルトのアクセントに使えそうだ。

まるでアームカバーのように見えていた肘上まで日に焼けた両腕は、元の肌色になろうとしている。

庭の影のエリアも拡がつて、棚に並ぶ盆栽の風景が違つて見える。

蚊取り線香にむせて咳き込んだりした夏の日々が終わる。

季節が進んだ先で、リンドウの射るような紫やゲンノショウコの赤紫が、晩秋の庭の宴に彩りを添えるだろう。



陶と一緒に 黒リュウを飾る

K N O	小野澤繁雄
河村布宮	慈子
郁子	

ウクライナかかし祭りに出されたは〈神様お願ひ〉少女の案山子
瀧山は初冠雪して山形に冬支度のこゑ聞こゆるごとし

雪の舞ふウクライナの爆撃痕「ぽかぽかカイロ」すぐ届けたい
蛙手のいろいろあるが落ちてているカエデ見本園二十種ばかり
珍しく秋が長いと話しつつ来年の手帳を買ひ求めたり

菩提寺の庭は練馬の保護樹林 桜、銀杏に楓の紅葉

オルソンの家とわが呼ぶ排水機場川べりにして川より高く

10月29日	11月4日	11月22日	11月25日	11月30日	11月30日	11月30日	11月30日
O	K	N	O	K	N	O	O

冬枯れの川辺を行けば来春の桜並木の明るさは見ゆ

すつきりと葉を落としたる桜の枝にはや花芽あり春遠からじ
枯葉ばかりになりたるさくら十月桜花の気配は春につづいて
どか雪のあと晴れ間のうれしさや清々として散歩に出でむ
黄葉の桜落ち葉が軒下に吹き寄せられる乾燥の季^{とき}

2023年

霜柱のこわれたみちがまたこわれ水のしめりは黒土の上
積もりたる雪がとけては流れゆくこの循環の冬は正直
二十三日ぶりの降雨に庭木みな生氣あふれて梅に一輪

1月5日	12月9日	12月15日	12月21日	12月27日	12月31日	1月12日	1月22日
O	N	O	K	N	K	N	K

●貧弱な庭に招きしズッキーニ巨木となるは思いもよらず

大橋千佳子

スーパーの売り場でしかみていらないズッキーニ。巨木となる、というこの歌に、思わず画像検索をしてしまった。ウリ科カボチャ属の果菜だという。手を出しにくいものだったが、いつかレシピ（次第）でつかうようになった。作者は栽培したこと、それも初めて（一連タイトルは、「この夏の初めて」）。そこには、招きし、という積極性と、何か謙虚なものがある（上句）。ズッキー二四首のうちの四首目はこれ、

ズッキーニ在りしマルチは堆く目にも舌にも盛夏懷かし

「マルチ」とは、畑のうねをビニールシートやポリエチレンフィルム、ワラなどで覆（おお）うことで、英語の「マルチング」を略（りやく）したことばだという（農林水産省）。これがしらなかつた。また次の歌に共感する。ほか、ヒデヨシ、電電公社、スマホデビュー、ウクライナの歌。

電動の草刈り機はたと止まりて無力なわたし庭に残つた

●おつとりとしていますね。と言はれても心の裡は大波小波

河村郁子

引用句部分が句点で終わっている。句点で、おつとりとしていますね、このことばから距離を置いている感じ。そうみえるということの内実が下句。「若き日のパニック障害…」のような歌（これが次歌）。タイトルは「マインドフルネス」。週刊誌も月刊誌も表紙が目次になつてているようなどころがあり、そこだけ読んでもする。それで、次の歌、

目を留める『P R E S I D E N T』の表紙には〈最高の瞑想・たつた1分〉

求めたる雑誌抱へて帰路急ぐそれのみにして気持ち安らぐ

雑誌に何があるのか。求めるというアクションを起こしたことは確か。策、とか好機とか、まづ始む、がある。

●たちまちに浮かびくるなり東京の初に住みたるアパート付近

布宮慈子

タイトルが「杉並区」なので、この歌のアパート付近も杉並区のものか。それも杉並区下高井戸。下高井戸も今や全国区かもしれない。三、六首目が次の通り、

折りも折かつて住みにし下高井戸の住所の人から歌集が届く
建物の裏手に畠の残るころわれは住みにき杉並区下高井戸

このあいだの歌で、やや特別な記憶に次の歌があり、これは面白いな、とおもつたし、時代もあ

るかな、ともおもつた。

お茶室の上が部屋にて条件は「うるさくしない人」にてありき

じつのところ、これらの歌はついでのものかもしれない。それは、次のような歌、

杉並の区長選挙がおもしろいことになつてをると知る六月

そうして、（僅差で）新人女性候補者・岸本さん当選せり、という歌（一連最終の歌）、の通り。

作者にとつてはこちらが当初の関心か。

前号作品短評B 〈慈子〉

●休日の前田道路はしづかにて会社の旗かポールにし揺る

小野澤繁雄

前田道路は、平日であれば通行量が多いのだろう。休みのきょうは静かで、会社の旗なのかポールにくくり付けられて揺れているだけだ。「し」に特別な意味はなく、語調を整え、上の語「に」を強調していると解釈。作者は、時折「し」を語調のために使うのだが、その使い方は巧みである。

つながつてた通学班ひとつが出ていつて残るひとつも縦列のまま

通学班としてつながつていた一つが出て、残りの一つも縦に並んだままである。これから出発しようとしているところか。通勤通学の時間、歩道は狭いから小学生は一列縦隊の形で進むのだろう。今は会話もできず、見えていても通学が楽しくない様子だ。マスク着用はいつまで続けるのだろうか。

●はたた神人工骨よそろそろ歩め

はたた神は、鳴りとどろく雷のこと。股関節の手術で人工骨を入れた友人は、早くもりハビリで

新野祐子

歩かされる。激しい雷の音のなか、そろりそろりと歩きはじめる。見守る作者は、ゆっくりでいいんだよ、とでも声を掛けているのかもしれない。はたた神とりハビリの取り合わせの妙。

ハクビシンに勝つた西瓜の腹撫でる

あるじ待つ馬鈴薯畑沸き立つて

友人が入院中に時折、その畑を見てあげていたようだ。昨今、ハクビシンに荒らされる畑が多いと聞く。害獣除けのネット等でハクビシンの害に遭わなかつたスイカよ、おまえは偉い、と撫でてやる。ウイットに富んだ句である。またジャガイモを植えた畑も恐らくはあるじの退院を喜んでおり、帰りを待つてゐるのだ。

● 静謐になりいるめぐりコロナ禍の長き日々にて夏はゆくなり

市川茂子

身辺は静かで穏やかになつてきているが、長く続くコロナの騒動が終わらないまま今年の夏も過ぎていくようだ。新型コロナの変異株やら何やら、個人ではなんともしがたい世の中である。

人生を上出来と言う作家にて九十七の断筆宣言

果つるまで書くとう佐藤愛子さん前年の言を撤回したり

言わざと知れた元気な老作家・佐藤愛子は九十七歳で断筆宣言をしたらしい。が、翌年になつて撤回し、死ぬまで書くと言つてゐるのだ。自分と似通つた年齢の人と比較するのは誰しもあること

と。わが身の元気の素となることもあるだろう。ちなみに佐藤愛子の近著は『ああ面白かったと言つて死にたい』『九十八歳。戦いやまず日は暮れず』など。タイトルだけ見ても破顔するような本である。

● 一時間に百十ミリの降雨とふわが市を報ずる全国ニュース

梅津純子

ことし山形県の南部では大雨でたいへんな被害があつた。その時のことだろう。

想定は床下浸水その上はあり得ぬ地形と見極め來り

障子照らす稻妻に目覚めつつ朝までの雨の量案じをり

大丈夫だろうと思つていても降りやまぬ雨に心配で不安な一夜が明けてゆく。一連の歌は、一刻と変わりゆく雨の様子と作者の心理を映し出している。

次々とラインに見舞ふは女友固定電話は遠き男の友

女友達とは常日頃からさまざま携帯電話のアプリを使って連絡をとつてゐる。^{ライン} LINEもその一つ。大雨の見舞いなどはケータイに文字が届いて、見てくれればそれでよし、といいくらいのもの。しかし、ふだん連絡を取り合つていない男の友達は固定電話で掛けてくるのだ。今どきの通信事情と男女の対応の仕方が現れていて面白い。

無二の会短信

◆今年もまたお隣さんから、佐渡のおけさ柿が届いたと言つておすそ分けがあつた。甘くておいしい柿が食べられた。スーパーでは先日まで各地から出荷された柿が広いスペースで陳列されていたが、おけさ柿は見当らない。次に行つた時は潮が引いたように柿が消えて、代りにみかんが並べられていた。日を追うごとに、年末年始の用品が入荷しているようだ。新しい年を迎える準備で浮き足立つてくるのだが、コロナの感染やインフルエンザの流行などに気を付けなければならない。年を重ねることが身にしみて感じられる。支えてくださる方々やご縁のある方々に感謝しながら、これからも安穏な日々であることを願つている。

市川茂子

◆或る夜目覚めたら全身が痛く強張つて寝返りも起き上がるることもできなくなつていた。家庭医から病院の神経内科と整形クリニックでの検査診察の一ヶ月の間に処方される痛み止めは効かず、夜も眠れない。拳旬に帯状疱疹が出て皮膚科医院に行くと、糖尿病の血糖降下剤をやめよとのことで総合内科へ。整形クリニックでは一度ステロイドの注射で劇的効果を見た上で病院の総合診療科への紹介となつた。知人がコロナワクチンの副作用ではないかと心配して、「東北有志医師の会」を

教えてくれた。私も四回目接種の一週間後のことであり、担当の医師に話すと「証明できないですね」と。三ヶ月間の迷走の末、リウマチ性多発筋痛症という診断で、ステロイドの服用を始めて痛みはなくなり、棒になつた体も正座以外はできるようになった。副作用が怖いステロイドは数年かけて減らしていくことだが、今はあの棒のようになつた体が日々解き放されて蘇生していく思いのなかにいる。

梅津純子

◆山形では七草粥を食べる風習はなくて代わりに「納豆汁」を食う。いうのも旧暦でさえ春の七草など雪の下であり、新暦ではなおさらのこと、ということなのだろう。最近、山形の郷土食「納豆汁」が季語であるということを知つた。しかも読み方は上五下五に使えるように「なつとじる」。「芋がらのゑぐ味も旨し納豆汁」

神村ふじ子

◆秋口から、公私共に行事が帰つてきました。完全形ではないにもかかわらず、どうもあたふたしてしまつて、それぞれに対応しているうちに早くも年末が見える時期に。「制限」をいいことにボンヤリと緩い生活に浸つていたことを実感しています。そして、動き始めたことで、暫く目をつぶつていた「人」とか「人のつながり」とかが見えてきて（悪いことだけではないのです）、気持ちを強くしていかなくてはと感じています。

大橋千佳子

◆一日一日が大事というような年齢、七十四歳になりました。その一日のなかで、朝（決まり）、夕食（中身を考える）の用意が大変で、とくに夕食は、用意して（同居することになつて三年）、残業の多い子を待ちます。フライパン1つで100レシピ（NHK出版）という本も手もとにあります。じぶんには、フライパン料理が多いな、と気づきました。その酷使されるフライパンも、六百六十円で買ったもの。オーブントースター（レンジはない）、炊飯器の買い換えが比較的多いところ、さすがにフライパンはさいごのフライパンにはならず、近々に買い換えが必要なようだつた。

小野澤繁雄

◆菩提寺の武藏野樹林の紅葉は毎年なにがしかの人出がある。暖かい昼下がりであったが、出会う人はいなかつた。コロナ禍の自粛が行き届いているのか、紅葉も終わり近くなつてているのか寺庭は深閑としていた。冬隣という季語を思い出した。本堂の横に芭蕉の碑がある。「父母のしきりに恋し雉の声」である。雉は春の季語だがなぜか侘しい感が漂う。

河村郁子

◆二〇二一年八月、朝日山地森林生態系保護地域に隣接する愛染峠一帯に、白鷹町が除草剤ラウンドアップを散布した。この件について翌月の白鷹町議会でS議員が質問した。私たち葉山の自然を

守る会はその議事録を一年後に入手した。農林課長は答弁している。「除草剤ラウンドアップマックスロードは、茎や葉っぱから成分を吸収して根を枯らす。いろいろな雑草に効き、広く普及している銘柄だ。ホームページを確認すると、雑草の茎葉にかかるで、土に落ちた成分は処理後一時間以内に土の粒子に吸着し、その後微生物により自然物に分解されると。約三日から三週間で半減し、やがて消失するという性格のもの。世界の環境保護区や世界遺産の保全に広く利用されないと記載されている」。私たちは腰を抜かすほど驚いた。アメリカではラウンドアップによりがんになつたとして、販売メーカーのモンサント社を訴えた。裁判ではモンサント社が敗訴し、原告に三三〇億円の賠償金が支払われた。世界各国にこのニュースが伝えられたが、日本ではほとんど報じられなかつた。この種の訴えを起こす原告は一二万人にのぼつてゐる。この現実を日本の政府と企業が知らないはずはない。それなのに除草剤は便利で安全なものと国民に喧伝し、使用量は年々増えている。緑が醜く赤茶色に枯らされた風景が遠のいていく季節となつたが、危険な除草剤をなくしたいという私の気持ちは強まるばかりだ。

新野祐子

◆新年おめでとうございます。とはいえる、世の中どうもそういう雰囲気ではない。戦いは終わらないし、日本も軍備を増強しようとしている。堂々と議論すればいいのに、国会で審議しないのはなぜだろうか。決然としないまま、国のだいじな決定がなされていくことに恐れを抱いている。新型コロナへの対処についても今後どうなるのか不明だ。ただひとつ言えることは、自分の体は自分で考えて守っていくしかないということである。

今回、神村ふじをさんのエッセイはお休みです。

◆ときどきミシン仕事を楽しんでいる。コロナ騒動が始まって、布のマスクを作ったのがきっかけだつた。作れるかもしれないと簡単な洋服を作つてみたら、じつに着心地がいい。バッグは買うものだと思っていたが、好きな柄や形を選んで作れるのだ。最近は生地もインターネットで注文することが多い。セールは季節が終わるころにあるから、吟味して買つてもいざ作ろうとした次の季節に向かっていて、なんだか気乗りしないこともある。そんなときは一年寝かす。大きいものを作ると必ず端切れが出る。それを使って小物を作る。色や形の組み合わせを考えるのが楽しい！作り方はネットで検索すれば動画がたくさんある。創意工夫する人の動画はどんどん進化することに驚かされる。端切れで巾着やポーチが出来上がり、生地を使い切つたと思うと余計にうれしい。む

かし使つたスキー用のポンチョがまだ取つてあつた。あれこれデザインを考えて、大ぶりの軽いエコバッグができたときは快哉を叫んだのだった。

何かを生み出すときには集中力がだいじだ。集中力のエネルギーは、そう長く続くものではない。たまには休憩も入れながら、壁に突き当たつてもしばらくしてまた歩き出す。何かが生まれたとき、そこに小さなよろこびを見つけられればいいのではないかと思う。

〈おすすめ本〉

・『ルボ 誰が国語力を殺すのか』（石井光太、文藝春秋、二〇二二年七月）

（題名の印象は、いい意味で裏切られた。国語力とは生きるために必要なもの。いま子どもたちがどんな状況で生きているのか、わたしたちは知らなければならない。後半に出てくる取り組みに光が見える）

・『太陽の子——日本がアフリカに置き去りにした秘密』（三浦英之、集英社、二〇二三年十月）

（わたしは新卒で、この本に出てくる非鉄金属・石油の会社の資料室に半年ほど勤務した。旧ザイールという国名はよく聞いた。ミステリーのように読めるが、実際にあつたこと。著者の粘りには脱帽だ）

・『聞き書き 世界のサッカー民——スタジアムに転がる愛と差別と移民のはなし』（金井真紀、カンゼン、二〇二二年十一月）

（布富慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊 展景 108号

1101111年1月1十五日 発行
編集・発行人 布宮慈子
制作 スタジオ・マージン
無一の会 「展景」 発行所
山形市上町二一一一七一〇〇一

info@muninokai.com